

イーハトーブフィールドブック

IHATOV FIELD BOOK

岩手山 宮沢賢治と出会う国立公園



国立公園の利用上のマナー

多くの方々に楽しくご利用いただくために、国立公園内では自然を大切にすることを心がけ、次のことを守ってください。

- ゴミは捨てずに持ち帰りましょう。
- 動植物をとらないでください。
- キャンプやたき火は決められた場所でしましょう。
- 野生動物に餌を与えないでください。

● ツキノワグマの生息域内です。クマとの事故を避けるために、音を出すなどして不意の遭遇が起らないようご注意ください。

● 危険回避や植生保護のため登山道から外れないでください。

● 登山道の浸食を防ぐため、ストックなどを使用する際は先端にキャップを付けましょう。

● 無理のない行動計画を立て、自身のレベルに合った利用を心掛けましょう。



発行元／環境省 東北地方環境事務所 発行年／2026年4月

※このガイドブックに記載されている情報は2026年4月現在のものであり、変更となる場合があります。

※写真やイラストはイメージです。実際と異なる場合があります。

IHATOV FIELD BOOK

イーハトーブフィールドブック

National
Parks
of Japan



岩手山

宮沢賢治と出会う国立公園

100年前、宮沢賢治は イーハトーブの大地に 「国立公園」という未来を思い描いた。

「銀河鉄道の夜」や「雨ニモマケズ」で知られる
岩手県出身の詩人・童話作家の宮沢賢治は、
自然、科学、音楽、芸術など幅広い知識で
独特の世界観を生み出しました。
岩手山に魅せられた彼は、
その一帯を国立公園に推薦する文章を残しています。
賢治の作品を手掛かりに、
国立公園に出かけてみましょう。

賢治と岩手山

岩手県のシンボル・岩手山は、その周辺を含めて
十和田八幡平国立公園に指定されています。国立公園
は、国を代表する優れた自然景観を保護しつつ、
学びや休養の場として利用するために、国が指定する
自然公園です。欧米で生まれた国立公園制度を日本でも
導入しようと検討が始まると、その誘客効果を期待して
全国各地で国立公園誘致の運動が起きました。大正14年
(1921)から全国16の国立公園候補地に関する調査が
開始され、北東北で唯一候補地となっていた十和田湖にも
調査員が訪れました。

同じころ、宮沢賢治は岩手山周辺が国立公園にふさわしい
と語った文を残していました。それが「国立公園候補地
に関する意見」です。この文章は友人である森佐一(後の
直木賞作家・森荘巳池)と岩手山麓へ1泊2日の野宿旅に
出たときの様子を描いたものです。“どうですか この鎔
岩流は／殺風景なもん

ですなあ”と語りかけるように始まります。

いったいこゝをどういふわけで、

国立公園候補地に

みんなが運動せんですか

いや可能性

それは充分ありますよ

もちろん山をぜんたいです

うしろの方の火口湖 温泉 もちろんですな

鞍掛山もむろんです

新しいものへの好奇心が強く、誘客のため、地元
花巻温泉に花壇の設計をした賢治は、岩手山周辺の自然
が国立公園として多くの人を魅了し、観光資源として活
用されながら、後世まで保護されていく姿を思い描いて
いたのかもしれませんが。

その後、十和田湖地域は昭和11年(1936)に『十和

田国立公園』として指定され、さらに20年後となる
昭和31年(1956)に岩手山を含む八幡平地域が加わる
形で現在の『十和田八幡平国立公園』が誕生しました。

賢治が見た心象風景・イーハトーブ

賢治は、詩人や童話作家であるだけでなく、花巻農学
校で教師を務めるなど、自然科学にも深く関心をもっ
て取り組んでいました。花巻市で生まれ、子どもの頃か
ら野山を歩いては鉱物採取に熱中し、家族や友達からは
「石ッコ賢さん」と呼ばれるほどでした。その熱は進学
のため盛岡市で暮らすようになっても続きました。

13歳から22歳までの思春期から青年期を盛岡市で
過ごした賢治は、盛岡中学校に在籍していた14歳のこ
ろ、教師に引率され初めて岩手山に登頂しました。こ
のことを契機に、賢治はその後幾度となく岩手山に登
ります。岩手山とその山麓の小岩井農場や温泉、葛根

田川といった雄大な自然が、賢治を魅了したのです。

賢治はこうしたフィールドワークの中で感じたことを、
数々の作品に残しました。岩手の自然を観察し、歩き、
触れ、音を聞きながら、賢治は豊かな自然風景をも
う一つの世界、イーハトーブとして描きました。賢治は
イーハトーブ(イーハトーヴ／イーハトヴ)という言葉に
ついて、「実にこれは著者の心象中に、この様な状景をも
つて実在したドリームランドとしての日本岩手県であ
る」と解説しています。

科学的視座で観察した自然風景と、頭に浮んだ心象を
手帳に書き綴り、言葉へと変換していくことで、賢治
自身が「心象スケッチ」と呼んだ作品を生み出していつ
たのです。

国立公園・岩手山には、賢治が歩き、観察し、作品に
残した自然が100年たった今も残されています。賢治の
作品を手掛かりにして、彼の見た風景や、彼が言葉にし
た光や音を探しに、国立公園に出かけてみましょう。

イーハトーブの物語

岩手山周辺で賢治が見た風景を探す

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラウドたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遥かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。／実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもつて実在した／ドリームランドとしての日本岩手県である。

『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』広告文

ほんたうに、かしはばやしの^{あお}青い^{ゆふがた}夕方を、ひとりで^{とほ}通りかかつたり、十一月の^{ぐわつ}山の^{やま}風のなかに、ふるえながら^た立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり^か書いたまでです。
『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』「序」

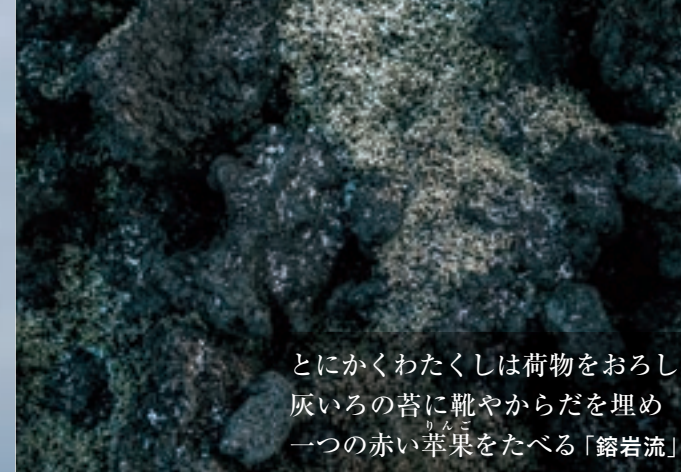
ましろなる
火花とゞろに
空は燃ゆる
霧山岳の
風のいたゞき
「短歌：大正六年七月より」

睡ってゐる人の枕もとに大きな石をどしりどしりと投げつける。安山岩の柱状節理、安山岩の板状節理。水に落ちてはつめたい波を立てうつろな音をあげ、目を覚ました、目を覚ました。「秋田街道」

いたゞきに
いささかの雪を刷きしとて
乳つむり山
いとゞいかめし
「短歌：大正五年十月より」

イーハトーブの物語

あれは雲です、柔らかさそうですね、
雲が駒ヶ岳に被さつたのです
水蒸気を含んだ風が
駒ヶ岳にぶつつかつて
上にあがり、
あんなに雲になつたのです。
「東岩手火山」



とにかくわたくしは荷物をおろし
灰いろの苔に靴やからだを埋め
一つの赤い苹果^{りんご}をたべる「鎔岩流」



外輪山の夜明け方、
三十三の石神に、
息吹きも白み競ひ立ち、
米^{こめ}を注ぎて奔り行く。
「岩手山巔」



一寸来ない間に社務所の
向ひに立派な宿ができた。
ラムプが黄いろにとぼつて
ゐる。社務所ではもう戸を
閉めた。「柳沢」



雲とざす
きりやまだけの柏ばら
チルチルの声かすかにきたり。
「短歌：大正六年四月」



どうですか この鎔岩流は
殺風景なもんですなあ
噴き出してから何年たつかは知りませんが
かう日が照ると空気の渦がぐらぐらたって
まるで大きな鍋ですな
「国立公園候補地に関する意見」



東が琥珀のやうになって
大きなとかげの形の雲が
沢山浮かんでゐた。
「風野又三郎」

賢治の言葉で岩手山エリアを読む

岩手山を中心とした国立公園とその周辺地域の自然を、賢治はどのように描いたのか。
賢治の言葉をガイドに、イーハトーブの自然風景を体験しに出かけましょう。

凡例： **項目** ■十和田八幡平国立公園内 ■岩手山麓スポット **作品** ●詩・短歌・俳句 ●童話・物語

十和田八幡平国立公園内

■岩手山

十和田八幡平国立公園の最高峰（2038m）の火山。古くは霧山岳や岩鷲山と呼ばれ山岳信仰の対象とされてきました。賢治は生涯にわたり幾度も岩手山に登っています。

●うす陽降るノートの上に／さみだれの／霧や
まだけのこゝろきたれり。

●蜜蜂がまたぐわんぐわん鳴る／（イーハトーブの死火山よ／その水いるとかゞやく銀との襷をおさめよ）「遠足統率」

●ね、そら、僕は途中で六十五回ねむりをして、その間考へたり笑ったりして、夜中の一時に岩手山の丁度三合目についたらう。あすこの小屋にはもう人が居ないねえ。僕は小屋のまはりを一ぺんぐるっとまはったんだよ。そしてまっくろな地面をじっと見おろしてゐたら何だか足もとがふらふらするんだ。「風野又三郎」

●すると俄に頭の上で、／「いや／＼、それはならん。」といふはつきりした厳かな声がしました。／見るとそれは、銀の冠をかぶった岩手山でした。盗森の黒い男は、頭をかゝへて地に倒れました。「狼森と笹森、盗森」

（他）●「岩手山」「東岩手火山」「森林軌道」「国立公園候補地に関する意見」●「柳沢」

■乳頭山（烏帽子岳）

岩手側からは烏帽子のように見える山頂が特徴。秋田側山麓には乳頭温泉郷が点在しています。

●すゞかけの木立きらめくこの朝を 乳頭山
雪刷きにつゝ

■秋田駒ヶ岳

コマクサやチングルマなど、多くの高山植物が見られる火山。「雨ニモマケズ」が書かれた手帳に記された、岩手県内32の山々「経理ムベキ山」の1つです。このリストは賢治が晩年に記したもので、法華経を埋経したいと考えていた場所と推測されています。

●あれは雲です、柔らかさうですね、／雲が駒ヶ岳に被さつたのです／水蒸気を含んだ風が／駒ヶ岳にぶつつかつて／上にあがり、／あんなに雲になつたのです。「東岩手火山」

■不動平

岩手山柳沢コースの9合目で、避難小屋が設置されています。複数のコースとの交差点となっており、江戸時代から休憩小屋が建っていたと伝えられています。

●谷の上の／はひまつばらにいこひしを／ひとしく四人ねむり入りしか。

●めさむれば／四人ひとしくねむりゐたり／はひ松ばらの／うすひのなかに。

■焼走り熔岩流

享保16年（1732）12月25日に岩手山山腹から噴出した熔岩が堆積したもの。長さ約4km、約1kmにわたって黒い熔岩が広がっています。岩手山焼走りコースの登山口にもなっており、賢治も度々訪れては作品を残しました。

●でこぼこの／熔岩流にこしかけて／かなしきことを／うちいのるかな。

●うるうるしながら苹果に噛みつけば／雪を越えてきたつめたい風はみねから吹き／野はらの白樺の葉は紅や金やせはしくゆすれ／北上山地はほのかな幾層の青い縞をつくる「熔岩流」

■網張温泉

岩手山網張コースの入り口にあり、賢治が中学生のころ岩手山登山の帰りに泊まった記録が残っています。国立公園の温泉地として賢治も「もちろん」入れるべきと考えていたようです。

●いったいこゝをどういふわけで、／県か国かでなぜ国立公園候補地に／みんなが運動せんですかなあ／えゝえ、もちろん山もいれましてです／薬師岳から鬼ヶ城／向ふの方のあのまっ青な火口湖に／網張小岩井もちろんですな「国立公園候補地に関する意見」先駆形



■葛根田川

岩手山南麓を流れる溪流。中流部にある「葛根田の大岩屋」（通称：玄武洞）は、岩手山の火山活動の中でも古い時代に噴出した安山岩の溶岩が、柱状節理を成したものです。葛根田川のほとりにある宿に宿泊した時の様子が「秋田街道」に描かれています。

●葛根田／谷の上なる夕ぞらに／うかびいでたる／あかきひとつぼし。

●葛根田川の河原におりて行く。すぎなに露が一ぱいに置き美しくひらめいてゐる。新鮮な朝のすぎなに。「秋田街道」

岩手山麓スポット

■鞍掛山

岩手山南東麓に位置し、標高897mと比較的簡単に登れる山として人気。現在の岩手山ができるより以前の古い火山群の1つで、賢治も「Ur-Iwate」と表現しています（Urは「原初の」を表す接頭辞）。名勝「イーハトーブの風景地」に指定され、登山口には「くらかけの雪」の詩碑が設置されています。

●ほんたうにそんな酵母のふうの／朧ろなふぶきですけれども／ほのかなのぞみを送るのは／くらかけ山の雪ばかり「くらかけの雪」

●鞍掛山もむろんです／ぜんたい鞍掛山はです／Ur-Iwate とも申すべく／大地獄よりまだ前の／大きな火口のへりですからな「国立公園候補地に関する意見」

（他）●「白い鳥」●「小岩井農場」

■小岩井農場

岩手山を背景に広がる美しい景色に心を惹かれ、賢治が足を運んだ歴史ある農場。『心象スケッチ 春と

修羅』に収録された「小岩井農場」は52ページにわたる賢治最長の詩です。賢治との関わりも展示されている小岩井農場資料館の近くに詩碑があります。

●すみやかなすみやかな方法流転のなかに／小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が／いかにも確かに継起するといふことが／どんなに新鮮な奇蹟だらう「小岩井農場」
（他）●「おきなぐさ」●「耕耘部の時計」

■柳沢

岩手山柳沢コースの起点。現在はキャンプ場がある馬返し登山口まで車で入れます。かつては手前にある岩手山神社が登山道の入り口となっていました。賢治も神社の社務所で休憩してから、早朝に出発し山頂を目指しました。

●寒くてガタガタする。みんなうらうら支度をしてゐる。ゆふべのつゞきの灰色ズックの靴、ラムプの光は青い孔雀の羽。「柳沢」
（他）●「柳沢野」●「風林」●「小岩井農場」●短歌

■狼森 笹森 盗森 黒坂森

岩手山麓の小岩井農場付近にある4つの森。狼森は「イーハトーブの風景地」に指定されています。

●小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森で、その次が笹森、次は黒坂森、北のはづれば盗森です。／この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巖が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。「狼森と笹森、盗森」

宮沢賢治の岩手山登山史

運動が苦手でも登山では健脚を見せた宮沢賢治。創作の源となった岩手山との関わりを紐解く。

岩手山を目指す少年たち

宮沢賢治が初めて岩手山に登ったのは、盛岡中学時代でした。進学のため親元を離れ、寮生活を送っていた賢治は、幼いころから石集めが好きで、岩手山麓の鬼越などにはたびたび足を運んでいましたが、そびえ立つ岩手山そのものに登る機会は、すぐには訪れませんでした。

最初の岩手山登山は、賢治が中学2年生となった明治43年(1910)6月18日。博物学教諭でもあった寄宿舎の舎監長が引率する、希望者80人による植物採集登山でした。現在では考えられませんが、一行は午後2時に学校を出発し、歩いて柳沢まで向かっています。岩手山神社の社務所や周辺の宿で休んだのち、翌19日の午前1時から2時頃、松明を手に出発しました。これは当時一般的だった登山形態で、山頂で御来光を拝むことが目的でした。

この時の山行は天候に恵まれたようで、賢治自身の言葉に残っていませんが、同行者の記録には、雲海の中から赤い点が浮かび、それがやがて黄金色に広がっていく御来光の感動が記されています。少年たちにとって、忘れがたい体験だったことでしょう。

柳沢から山頂へ、そして網張へ、

2度目の登山は同年9月23日から25日まで。5年生6人、3年生1人、2年生3人の寮生に引率教員を加えた計11人での山行でした。前回同様、麓で休んでから松明を灯して登りましたが、日の出は四合目で迎えることになります。風の強い日で、山頂では校歌を歌い、そのときの様子を賢治は「風さむき岩手のやまに われらいま 校歌をうたふ先生もうたふ」と短歌に詠んでいます。

この校歌は生徒が2年前に作詞、選曲したもので、時代ごとに歌詞の部分修正を加えながら、現在も盛岡第一高等学校の校歌として歌い継がれています。「世に歌はれし浩然の 大気を華めそゝり立つ 秀麗高き岩手山」。岩手の最高峰にふさわしい歌詞に、登頂を果たした少年たちの高揚感が重なります。

その後、一行は西岩手火山と呼ばれる鬼ヶ城のルートを下り、青い水をたたえる火口湖を眺めながら、網張温泉に下りて一泊し、悪天候のなか小岩井

明治43年9月岩手山登山後の宮沢賢治前列左と寮生たち頭には学生帽、足元は足袋にわらじのいでたち



写真提供／林風舎

農場を経て盛岡へ戻っています。

帰寮前には、5年生の提案で寄宿舎近くの写真館に立ち寄り、記念写真を撮影しました。あまりに汚れていたためスタジオに入れてもらえず、屋外での撮影となりましたが、その分、登山の実感が伝わる一枚となっています。

この後も賢治は単独登山を行うなど、盛岡中学時代だけで八回は岩手山に登ったといわれています。賢治とともに登った後輩によれば、「六根清浄、おう山繁盛」と唱えながら登っていたそうです。

山を歩く、作品が生まれる

盛岡高等農林学校(現岩手大学)に進学すると、賢治はさらに頻繁に岩手山周辺を訪れるようになります。学校の農場が麓にあり実習に通い、地質調査で滝沢方面にも足を運びました。土曜の午後から日曜にかけて泊まりがけで鉱物採集に出かけることも多く、持ち物は五万分の一地図、星座表、コンパス、手帖、懐中電灯、採石用ハンマー。食料のビスケットはポケットに。宮沢家の話では、砕いた鰹節を口に含みながら歩いたと伝えられています。

文芸誌『アザリア』の仲間たちと出かけた、後に「馬鹿旅行」と呼ばれる夜通しの散策は「秋田街道」、弟や従弟を連れて歩いた体験は「柳沢」という作品に描かれました。年の離れた友人森佐一といっしょに野宿しながら焼走り熔岩流を歩いた思い出は、「国立公園候補地に関する意見」「春谷曉臥」になりました。

花巻農学校に勤めてからは、生徒たちを引率して岩手山に登っています。そのときの様子は「東岩手火山」に詳しく記され、書き留められた心象スケッチは、賢治の心の動きを標本のようにとどめ、私たちに臨場感をもって伝えてくれます。

賢治の心を整える山

岩手山は明治までは山伏たちが登る女人禁制の信仰の山でした。『岩手山』(岩手放送 昭和48年)によれば、例大祭では、盛岡の寺院から山伏たちがほら貝を吹きながら岩手山神社に参詣したそうです。白装束で神事として登山する人たちの描写が、童話「風野又三郎」にも描かれています。

賢治にとって岩手山登山は、スポーツや娯楽というだけでなく、精神的な意味をもつ行為でした。外輪山を巡り、石像に米をまいて読経する姿も記録されています。父の頼みで、妹二人を連れて登ったこともありました。この時、賢治はおにぎりを供え、法華経を唱えています。

岩手山の高山植物帯は国の天然記念物にも指定され、季節にはコマクサなどの花が咲き誇りますが、賢治の作品にはあまり登場しません。意識は花よりも、さらに遠い場所へ向かっていたのかもしれない。

四行詩「岩手山」は、天空から地上を見下ろしてい



柳沢からの岩手山。記録に残る賢治の登山コースはほぼ柳沢コース

るようだ」と評されます。「そらの散乱反射のなかに／古ぼけて黒くえぐるもの／ひかりの微塵系列の底に／きたなくしろく澱むもの」岩手県で一番高い場所である岩手山山頂で、賢治の意識は空と一体となっていたのかもしれませんが。

わたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です／(あらゆる透明な幽霊の複合体)／風景やみんなといっしょに／せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける／因果交流電燈の／ひとつの青い照明です／(ひかりはたもち、その電燈は失はれ)『心象スケッチ 春と修羅』「序」より

宮沢賢治登山年表

(記録や証言により登山年がわかるもののみ)

年／年齢	月	目的・エピソード
明治43年 (15歳)	6月	盛岡中学2年。18～19日植物採集登山隊として岩手山に初登山。一行はムシトリスミレ、ミヤマキンバイ、チングルマ、ショウジョウバカマなどを採取
	9月	23～25日寮生有志で2泊3日の岩手山登山
明治44年 (16歳)	1学期	盛岡中学3年。単独で岩手山登山
	5月	小岩井農場遠足
大正元年 (17歳)		盛岡中学4年。度々岩手山に登る
大正4年 (19歳)	4月	盛岡高等農林学校に入学。雫石の岩手山麓にある御明神経済農場・演習林へ通う
	4月	化石採集のため西山村に1泊
大正5年 (20歳)	6月	10～11日岩手山登山
	7月	5日親友と岩手山登山
		夏休みに同室の寮生と岩手山登山
大正6年 (21歳)	4月	4～6月、短歌によれば岩手山登山、葛根田などで遊ぶ
	6月	弟清六や従弟と、岩手山麓に遊び、道に迷い野宿
	7月	7日の真夜中、友人4人で春木場まで徹夜で歩く。「秋田街道」となる
	7月	14～15日親友と岩手山登山
	10月	弟、従弟と岩手山登山。「柳沢」となる
大正9年 (24歳)	9月	12～13日妹シゲ、クニと岩手山登山
	6月	「岩手山」「高原」「印象」「高級の霧」記す
大正11年 (26歳)	9月	17～18日、農学校教諭として教え子たちと岩手山に登山。「銅線」「滝沢野」「東岩手火山」となる
大正12年 (27歳)	10月	28日、日曜の一日、岩手山麓をぐんぐん歩いた「一本木野」「鎔岩流」となる
大正13年 (28歳)	6月	21日～22日生徒をつれ岩手山登山
大正14年 (29歳)	5月	7日生徒を引率し小岩井農場へ。「遠足統率」となる
	5月	10～11日森佐一と岩手山麓へ。「国立公園候補地に関する意見」「春谷曉臥」などとなる
	7月	4～5日農学校の生徒38人と岩手山登山

賢治の 岩手山山行を辿る

大正14年(1925)『岩手毎日新聞』に、
賢治先生に引率された岩手山登山をまとめた、
花巻農学校の生徒の手記「岩手山紀行」が掲載されました。
7月4日、5日の登山の様子は、
宮沢賢治の最後の岩手山登山記録です。
大正時代の登山を追ってみましょう。

1 滝沢駅から柳沢経由で馬返しへ

7月4日、一行は午後4時に滝沢駅につき、歩いて柳沢コースにむかいます。現在の岩手山の山開きは7月1日ですからちょうど同じ頃です。柳沢では、「立地による樹種のちがいの模型のよう」と柏や白樺、谷筋の低温な場所にはハンノキを観察しています。山鳩の鳴き声も聞こえます。赤松林を進むと、祭りでにぎやかな柳沢の神社を通ります。先にある放牧地へ出ると、オキナ草の冠毛が光り、青い実をつけたスズランが咲いています。放牧地には馬の姿もありました。

2 登山道入り口から3合目

月明かりのころには谷に点在する土柱や、熔岩と火山灰とが重なり合った互層を観察しています。岩手県内には広く火山灰土壌が広がっていますが、熔岩との互層が見られるのはこのエリアの特徴です。樺やカエデの喬木帯は次第にツツジやヤナギの灌木帯に変わり、「みんな月光にきらめく低い木立の中を、熔岩流を踏んで登って」いきます。頼みにしていた三合目の小屋がつぶれていたようで、「熔岩の屋根の下で火を焚いて休憩」をしてから上を目指します。

3 4合目から9合目不動平へ

高山植物も目についてきます。「ハクサンチドリやミヤマオダマキの花さく火山礫を踏んでのぼる嶺を越えて来るつめたい風は時に硫黄の匂ひを選び鈍い月光の谷の中では夜なのにしきにやぼうぐいが啼いた」と記されています。赤紫色のハクサンチドリはいまも登山道で見ることができ、登山者の目を楽ませています。不動平に到着すると、「黒いハイマツの波、鬼ヶ城の恐ろしい刻み」と出合います。寒さは厳しく、雪も残っていました。八合、九合の小屋は人であふれ、同じ時期に多くの人が岩手山を目指していたことが分かります。あまり休めなかったのか、一行は小屋の前で枯れ木を集め、いよいよ山頂へ向かいます。



4 御室火口

一行は11時頃に外輪山に到着。前年に刊行された『心象スケッチ 春と修羅』の「東岩手火山」の冒頭「月は水銀 後夜の喪主」を思わせる月も、空に上っています。「東岩手火山」は詩集刊行前には新聞に「外輪山」というタイトルで掲載されました。まさにここが詩の舞台。外輪山の内側にあるのが御室火口。その巨大な古い火口の底で「月光の水銀の中に赤い火を焚き」とあり、いまは禁止されていますが火を焚いて、新聞紙をシャツに重ねて暖を取りながら青年たちは日の出まで眠ります。ミヤマヒカゲノカツラも広がる場所で、生徒たちは賢治がつくった「種山ヶ原」の劇中歌「牧歌」を合唱しました。賢治のつくった歌が生徒たちにも浸透していたことが伝わります。

5 外輪山のお鉢廻り

一行は通常時計回りに回るお鉢廻りを逆に歩き、夜中の2時半頃に山頂へ到着します。東の空を眺めて日

の出を待ち、太陽がのぼると掌を打ち瞑想します。振り返ると、「桔梗色や緑にかすんだ山々の向こうに、寂しく銀を戴いた富士山形の鳥海山も見えた」とあり、天候に恵まれていたことが分かります。

6 火口湖を眺めて帰路へ

辺りが見えるようになってから西側を回り、西岩手火山の火口原湖や硫黄孔、千俵岩などを指さしながら歩きます。童話「気のいい火山弾」に登場しそうな、長径1メートルを超える典型的な火山弾も見つけていま

す。足元にはピンク色のコマクサや黄色いタカネスマレが露に光っていました。不動平ではミヤマヤナギの花が羽虫のように飛ぶ様子を眺めています。一行はここからまた同じコースをたどり、一本木口へ降り、麓の灌木の間で初めて一休みして帰路につきます。

岩手山の登山道を歩けば、賢治が見た花、聞いた風、見上げた空が今も同じようにそこにあります。賢治の足跡を案内に、イーハトーブの真ん中にある岩手山の自然を自分自身で感じてみませんか。

賢治が見た岩手山の植物



ハイマツ
岩手山の山頂を埋める1mくらいの常緑低木。6〜7月に赤い花が咲く



ハクサンチドリ
6〜7月に見られる、赤紫色の千鳥が飛ぶような形の花



コマクサ
6〜9月にピンク色の花が咲く岩手山を象徴する高山植物の女王



タカネスマレ
肉厚な丸い葉の黄色いスマレ。最も高いところで咲くスマレ科の花

宮沢賢治と火山

国立公園としての八幡平地域を特徴づけるのは、岩手山に代表される火山景観です。
童話『グスコーブドリの伝記』で火山と人々の生活との関わりを描いた
賢治の視点で、火山としての岩手山を観察してみましょう。



薬師岳の火口にある妙高岳と御室火口(手前)。
外輪山のピークが、岩手山の最高峰薬師岳

イーハトーブの火山たち

十和田八幡平国立公園八幡平地域は、成層火山や爆裂火口、熔岩流、火口湖等の多種多様な火山景観と、それらと一体となった雄大な自然林の傑出性が高いことが評価され、国立公園に指定されました。

賢治は、童話「グスコーブドリの伝記」でイーハトーブの火山をめぐる物語を描いています。

じつにイーハトーブには七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしてゐるのでしたし、五十幾かの休火山は、いろいろな瓦斯を噴いたり、熱い湯を出したりしてゐました。

「イーハトーブのまん中にあたるイーハトーブ火山」も登場し、岩手山を最高峰として八幡平や秋田駒ヶ岳等の火山が連なり、現在でも噴気、噴湯、泥火山、地熱地帯等の火山現象が活発に見られる八幡平地域の風景がそのモチーフとなったことがうかがわれます。主人公のブドリがイーハトーブ火山局という観測所で働く中で、火山が人々の生活を脅かし、恩恵をもたらしたりする様子が描かれています。

実際に、大正8年(1919)7月15日、賢治が23歳のころには西岩手山大地獄谷で水蒸気爆発が発生しています。大正火口と呼ばれる新火口を形成し、網張温泉周辺まで火山灰が堆積するほどの噴火となりました。童話に登場する火山の脅威と恵みは、岩手山が生み出した風景と文化に重なります。

東岩手火山の火口にて

そんな火山としての岩手山を、賢治が実際に歩いた様子が、218行の長詩「東岩手火山」に残されています。この詩は、『心象スケッチ 春と修羅』に収められた、大正11年(1922)9月18日の創作です。元は、岩手毎日新聞に「心象スケッチ 外輪山」として掲載されたものでした。この時、賢治は花巻農学校の教師として、生徒たち5、6人を連れて案内しながら岩手山に登っていました。岩手山は、長年の数々の火山活動によってできた火山の複合体です。大きくは山頂の薬師火口を中心とする東岩手火山と、大地獄谷や御苗代湖、御釜湖を内部に有する西岩手カルデラを中心とした西岩手火山に分けられます。

「東岩手火山」は、賢治一行がよく晴れた日の早朝、まだ星空が広がる時間に薬師火口の外輪山に到着し、お鉢巡りをしようというところからはじまります。

月は水銀、後夜の喪主
火山礫は夜の沈黙
火口の巨きなめぐりを見ては
たれもみんな愕くはづだ

薬師火口の外輪山は、約7000年前に東岩手山の山頂部が崩壊し大きな馬蹄形火口が形成されたのち、火口周辺の噴火活動により形成されたものです。現在の直径は約550mで、外輪山の最高点が山頂の薬師岳。火口内には妙高岳があり、その西側に貞享3年(1686)の大噴火によって形成された御室火口があります。



お鉢廻りの外輪山の自然な美しい歩道で山頂を目指す人々



賢治も見た西火口原の火口湖

向ふの黒い山……つて、それですか

それはこのつづきです

このつづきの外輪山です

あすこのてつぺんが絶頂です

向ふの？

向ふのは御室火口です

時刻は3時40分、日の出まではあと1時間ほどあり、星座がよく見えました。

あれはオリオンです、オライオンです

あの房の下あたりに

星雲があるといふのです

いま見えません

その下のは大犬のアルファ

冬の晩いちばん光つて目立つやつです

9月中旬4時頃の星空を観察すると、ちょうど南東の空にオリオン座とおおいぬ座のシリウスが縦に並び、賢治と同じ星空を見ることができます。

日の出までの時間、生徒たちに自由行動を促すと賢治はスケッチをとるため歩きだします。

二十五日の月のあかりに照らされて

薬師火口の外輪山をあるくとき

わたくしは地球の華族である

生徒たちが持った提灯の灯りを目で追ひ、会話を聞きながら、賢治は呼びかけます。



岩手山麓にある網張ビジターセンターでは、岩手山の成り立ちと火山が人々の暮らしに与える恵みについて学ぶことができます

《御室の方の火口へでもお入りなさい

噴火口へでも入つてごらんなさい

硫黄のつぶは拾へないでせうが》

貞享3年(1686)の御室火口の噴火があったのは3月のことでした。水蒸気爆発によって融雪型泥流が発生し、山麓の家屋を襲いました。火口周辺にはその時に放出された火山弾が残されています。賢治は童話「気のいい火山弾」で、「稜がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼしたやうな形でした。そして、ななめに二本の石の帯のやうなものが、からだを巻いてありました。」と、空中に飛び出した熔岩が引き伸ばされながら固化してできる紡垂状火山弾の特徴を描写しています。

西岩手火山の青き火口湖

このときは描かれなかった西岩手火山ですが、賢治が中学2年生のときに詠んだ短歌が残されています。西岩手火山は、東岩手よりも古い火山です。約6万年前に陥没して形成されたとされる西岩手カルデラの内部には、その後約3～5万年前の火山活動で形成された御苗代湖と御釜湖という2つの火口湖が存在します。

石投げなば雨ふるといふうみの面はあまりに青く
かなしかりけり。

泡つぶやく声こそかなしいぎ逃げんみづうみの青
の見るにたえねば。

うしろよりにらむものありうしろよりわれらをに
らむ青きものあり。

賢治は、カルデラ内にたたずむ神秘的な火口湖の青さに畏怖を抱いていたのです。



11月の焼走り熔岩流。大地を覆う黒い岩石は「含カンラン石シソ輝石普通安山岩」



雪のおかげで見やすくなった熔岩流の流れ。水墨画のようだ



夏よりもはっきりと見えた噴出口跡

イーハトーブの11月 熔岩流の大地に立つ

11月下旬、焼走り熔岩流へ向かった。
宮沢賢治もこの場所に足を運び、
「熔岩流」「国立公園候補地に関する意見」という
2つの作品を残している。
作品の舞台を歩いてみた。

1 西根インターチェンジから車で15分、岩手山の北東を通る県道233号で焼走り熔岩流の駐車場に着く。今日の同行者は、岩手大学人文社会科学部の木村直弘教授。専門は音楽学と美学・藝術学で、宮沢賢治いわて学センターの副センター長でもある。賢治について話を伺ううち、「風の又三郎」からサウンドスケープ——音風景の話題へと展開した。「音は耳だけでなく、全身で聴くもの」という一言が心に残り、先生とのフィールドワークが実現した。

舗装された駐車場から少し階段を上がると、世界が切り替わる。一面黒い大地、と書きたいところだが、前夜に降った雪がうっすらと覆っていた。夏と

はまったく違う表情だ。だが季節は11月。『注文の多い料理店』の序文で賢治が語った「十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです」。今日は、まさにそんな日だった。

2 「なんだ、もうこんなのがありますね」
先生が立ち止まって眺めていたのは案内板だった。そこには「3分間、目を閉じてみよう」と書かれている。鳥の鳴き声もいくつか記されていて、あきらかにサウンドスケープ的なガイドだ。目を閉じると、寒さのなかでも鳥の声が澄んで響く。意識するまで気づかなかった風景がそこにあった。「なんの音だろう、ずっと鳴ってる音がありますね。川みたいな」「このへん、川はないですね」「高速道路かな？」
推理を重ねていると、ざらついた音が大きくなり消えた。どうやら正体は駐車場に止まった車のようだ。「なんだ」
無粋な結末に苦笑しつつ、私たちは黒い大地を歩き始めた。

3 木村先生は、岩手山登山のあと、ここへ下りてきたことがあるという。緑の林を抜けたあと、突然あらわれる黒い世界。その異様さから、賢治はここを「あの世とこの世の間」ととらえていたのではないかと先生は語る。『心象スケッチ 春と修羅』に収められた「熔岩流」は、大正12年10月28日に記録されたスケッチだ。

けれどもここは空気も深い淵になつてゐて
ごく強力な鬼神たちの棲みかだ
一びきの鳥さへも見えない

熔岩流の厚さは約9.5mあって、ほとんど植物は根を張れないという。そんな深い淵は、たしかに静かだ。賢治は一人で来たのだろうか。いまは鎖が安全に導いてくれるが、何もない時代にこの場所を歩くのは心細かったに違いない。「あそこが噴出口」
声に導かれて山を見上げる。雪の白さのなかに、馬蹄形の噴出口跡が2つ浮かび上がっている。そこから流れた熔岩の動きが、日本画の雲水のように見えた。雪は風景を覆い隠すどころか、かえって地形を

際立たせていた。

4 足元に広がる気泡の空いた黒い岩塊はスコリアと呼ばれる。形状もばらばらなため、足元は不安定で、トレッキングシューズで来て正解だった。厚い靴底に押しつぶされ、音がするのだが、表記が難しい。オノマトペの天才賢治を改めて思う。自然観察路を歩いているのはわれわれだけ。世界の果てのようでもある。「静かですね、音が吸収されるから」
軽石のように穴だらけの黒い石と雪のせいだ。歩行音の「ほこほこ」が、この場所の基調音になっているという。「雪で丸くほこほこして見えて、音も丸くなる感じ」
見る風景と、聴こえる音が重なっていく。全身で聴くということは、視覚もまた音に変換されることなのだ。空を見上げると、「無音」という音とともに雲が流れていく。

5 黒い大地にまるで砂漠のオアシスのように、木々が数本生えている場所があった。ここだけ条件がよかったのだろう。近づくとも音が変わった。

登山道のあたりに残る紅葉

入口近くで見かけたヤドリギ

賢治はコケをバンに見立てていた

空を飛ぶのはトビとカラス

『心象スケッチ 春と修羅』「熔岩流」

「熔岩流」の最後にシャツとして登場する北上山地



風が枝葉を抜け、層をなして重なる。まるでおしゃべりをしているようだ。賢治の作品で木や花が語り出すのは、こんな体験から生まれたのかもしれない。

さらに進むと、また川のような音がする。黒い石の下を水が流れている錯覚。向こうに展望台も見え、し道路が近いからかと思ったが、冬は通行止めになっていて展望台まで車はこない。「やっぱりこれは風の音。ざあざあ、ごうごうみたいな。風の音はイーハトーブの基調音そのもの！」サウンドスケープでいう無意識に聞き逃している常にある基調音。見えないだけで、風の又三郎はいまもこの地を駆けている姿が浮かんだ。

6 向かう展望台の後方は三ツ森山。「国立公園候補地に関する意見」で賢治は交響曲を奏でようとする。

しまひはそこの三つ森山で

交響楽をやりますな

第一楽章 アレグロブリオははねるがごとく

第二楽章 アンダンテ やゝうなるがごとく

第三楽章 なげくがごとく

第四楽章 死の気持ち

木村先生とともに。音が消える大地で、ぼこぼこした靴の音、風の音を感じる



よくあるとほりはじめは大へんかなしくて
それからだんだん歓喜になって
最後は山のこっちの方へ
野砲を二門かくして置いて
電気ですどんと実弾をやる

ここから森佐一少年に、パンをすすめるシニカルでユーモラスなくだりが続く。交響楽で野砲（大砲）を使う曲といえば、チャイコフスキーの序曲「1812年」が思い浮かぶ。以前、そのことを木村先生に話したところ、完全一致ではないが、楽章表記に即せばベートーベンの運命交響曲のほうが近いのではないか、という答えが返ってきた。

ゴールの展望台が見えはじめたところ、不意に聞き慣れない音がした。トタン屋根の工事でもしているのだろうかと思っていると、先生がそれに気づいて教えてくれた。「この空気を切り裂くようなバリバリって、大砲の実弾射撃の音ですね。雷鳴のような金属音」賢治のいうところの「ずどん」だった。近くの自衛隊演習場からの音。賢治の「ずどん」が、現代に再現された瞬間だった。



松葉のベッド

数ミリのクモの営みもある

岩かと思ったら白樺の根元

7 熔岩の終わりには白樺が立っていた。根元は歪み、たくましい。舗装路を挟んで展望台があり、階段の登り口の碑には「熔岩流」が刻まれている。

喪神のしろいかがみが
薬師火口のいただきにかかり
日かげになつた火山礫堆^{れきたい}の中腹から
畏るべくかなしむべき砕塊^{プロクレーベ}熔岩の黒

まるで文学的現地ガイドだ。展望台に上ると白い雪をかぶった岩手山が、砕塊熔岩の黒い大地にそびえている。あたりは、さっきの小さなオアシスのように、松林や足元の白樺を抜けて、風の音が立体的に交差する。「ちょうどホールの客席みたいです」先生は静かな黒い大地を見下ろす。「交響曲で実は大事なものは“圧”なんです。生のオーケストラでなければ味わえないもの」風の音の中で、その言葉が胸に落ちた。「ここの、ごうごうという風に交響楽的な圧がある」そうだ、風の交響楽だ。鬼の棲み処で奏でられる天

然のオーケストラ。熔岩流そのものは音を発しない。だからこそ、音が立ち上がる。新鮮な発見だった。

8 帰り道は、来た道をそのまま引き返した。真正面には岩手山があり、広い空を雲が彼方へと走っていく。宇宙のかなたにある太陽から、光と熱がまっすぐに届き、足元の雪はほとんど消えていた。「『イーハトーブ農学校の春』にある、“光がごうごう鳴っている”という表現は、こういうイメージなのかなと実感できました」と、木村先生。賢治は音を封じ込めたのだ。だからこそ賢治は、名前ひとつ、オノマトペひとつにまで、独特の響きを与えたのだろう。風を見て、聞いて、触れて、食べ、そして書いた賢治。その心象スケッチを現地でたどると、印象はさらに鮮明になる。「交響曲に似た多重な音や、あの“圧”の感じは、やはり現地に来ないとわからないことでした」フィールドワークの終わりに、先生はそう語った。11月のイーハトーブ。わたしたちは、賢治と同じ場所に立っていた。変わらない音が、いまもここにあった。

焼走り熔岩流ガイド

八幡平市にある十和田八幡平国立公園唯一の特別天然記念物。岩手山の北東斜面、山腹から山麓にかけて広がる長さ約3.4キロにも及ぶ熔岩流。江戸時代、享保16～17年(1732)ごろの噴火によって生まれたとされる。

展望台 階段で登ると岩手山に向き合うひととき



宮沢賢治詩碑 『春と修羅』に収録されている「熔岩流」が全文刻まれている



焼走り熔岩流マップ



Deep Kenji

賢治をもっと深く知る

岩手には、宮沢賢治をより深く知るための施設や、研究・愛好活動が続ける団体があります。ここではそのうちの二団体をご紹介します。関係者の語る言葉が、新たな賢治への入り口になります。



写真提供:林風舎

宮沢賢治年譜

■明治29年(1896)	岩手県花巻市に生まれる
■明治42年(1909)	県立盛岡中学校入学
■大正4年(1915)	盛岡高等農林学校(現・岩手大学農学部)に入学
■大正10年(1921)	稗貫農学校(花巻農学校を経て現・県立花巻農業高校)教諭となる
■大正13年(1924)	『イーハトーヴ童話 注文の多い料理店』『心象スケッチ 春と修羅』刊行
■大正15年・昭和元年(1926)	「羅須地人協会」設立
■昭和6年(1931)	東北砕石工場技師嘱託。11月3日手帳に「雨ニモマケズ」記す
■昭和8年(1933)	9月21日「国訳妙法蓮華経」の頒布を遺言し永眠

宮沢賢治いわて学センター

学術的知見で、宮沢賢治を探究する。

宮沢賢治の母校である岩手大学の人文社会科学部「宮沢賢治いわて学センター」は、宮沢賢治に関する研究・教育・普及活動を行い、さらに岩手に根ざした幅広いテーマに取り組む学術拠点です。前身である「岩手大学宮澤賢治センター」時代から全学の教員による活動を基盤に研究が続けられてきました。現在は人文社会科学部を中心に、他学部や他大学の先生とも連携してシンポジウム開催や論文集『賢治学+』刊行などの実績を重ねています。岩手大学ならではの研究成果を地域へ還元するとともに、国内外へ発信することを目的に活動しています。定例会はオンライン開催で、事前登録で誰でも聴講できるようになっています。

「賢治×国立公園トーク」

賢治さんに学び、自然に学ぶ

センター兼務教員 岩手大学教授 伊藤菊一さん

高校の化学の先生が賢治研究家の田口昭典先生で、授業の前に作品を読んでくれて興味が湧き、岩手大学に進学しました。ザゼンソウなど発熱植物の研究をしています。同じ研究対象のアルムマキュラムの名前を賢治さんの手帖で、直筆で見たときは嬉しくなりました。研究対象は師です。自然に学ぶ感覚は賢治さんと共通していると思います。

私は賢治さんは実践の人だと思っています。賢治さんの卒業論文に黒ボク土が出てきます。植物が育ちづらい火山灰土(酸性土壌)のことで、賢治さんは命を費やしても、これを変えようとしたんですね。

賢治さんの年を越えてから、考え方に関心が移りました。亡くなる10日前に教え子に送った手紙が好きです。人間賢治がいるなと感じられて。あと「一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならぬものは苦しんで生きていませう」が染みる。賢治さんの言葉だからこそ、私もそうありたいと思います。

子どもの頃、家族で秋田駒ヶ岳が見える場所まで出かけた際に、噴火の音を聞いたんです。こんなものに人間がかなうわけがないと感じました。本来の自然を学べる場所が国立公園だと思います。この資源が次世代の賢治を生み出す源になったら素晴らしいと思います。

盛岡・宮沢賢治の会

賢治を知る、読む、語り合う

盛岡・宮沢賢治の会は、宮沢賢治の作品を読み、語り合い、その魅力を広く伝えていく会です。賢治が亡くなった翌年に東京で「宮沢賢治の会」として発足し、以来現在まで活動を継続してきた、歴史ある会として知られています。各地で賢治の会が増えたので、後に「盛岡」をつけるようになりました。毎月第3土曜日には例会を開き、作品の読解や学びを深めています。また10月には、岩手公園にある賢治の石碑前で「碑前祭」を行い、あわせて特別講演会も開催。他の会とも活動をすることもあります。賢治の青春の地・盛岡に根ざし、岩手の人が「賢治はこんな人」という話ができるよう、賢治を読み継ぐ文化を支える活動を続けています。

「賢治×国立公園トーク」

賢治さんから「未来」を学ぶ

盛岡・宮沢賢治の会会長 佐々木陽さん

宮沢賢治さんへの興味や魅力の形が多様化する一方で、賢治さんのことは知っていても作品を読んだことがない人もいます。そこで、物語を理解する大人の為の読書会を定期的に開催しています。「紫紺染めについて」と言う作品は、町の人が山に住む山男から「しめった黒い土を使う」といい色が出ることを教わる話です。紫根に含まれるシコニンが黒ボク土のアルミニウムと反応することを山男は知っていました。地場の産業を興すためには、自然のことを知らなければなりません。読者はここでそのことを学びます。

賢治さんの作品には自然環境に関わる話が沢山出てきます。自然との共生や理想的な未来に向けた社会への「提案」もしています。賢治さんは進学や就職などで悩んだ時には決まって「岩手山」に登り自然と触れ合っています。そして何千年と生きてきた岩手山が常に変わりなく、存在していることを語っています。この雄大な自然の中には人の心を「再生」する力があるとも賢治さんは言っています。人生や将来のことを友と語り合いながらその答えを見つけるための場所が今も国立公園として残っていることを、賢治さんといっしょに楽しむことをお勧めします。

賢治の世界を広げる施設

賢治を知るスポット

多面的な賢治を知る記念館

宮沢賢治記念館

住所 花巻市矢沢1-1-36

電話 0198-31-2319

開館時間 9:00～16:30

休館日 毎週火曜日
(祝日の場合、翌日以降の平日)、12/28～1/3

入館料 一般350円、高校生・学生250円、小・中学生150円



宮沢賢治研究の拠点

宮沢賢治イーハトーブ館

住所 花巻市高松1-1-1

電話 0198-31-2116

開館時間 9:00～16:30

休館日 毎週火曜日
(祝日の場合、翌日以降の平日)、12/28～1/3

入館料 無料



視覚的・感覚的に賢治の世界観を楽しむ

賢治の学校(宮沢賢治童話村)

住所 花巻市高松26-19

電話 0198-31-2211

開館時間 9:00～16:30

休館日 毎週月曜日
(祝日の場合、翌日以降の平日)、12/28～1/3

入館料 一般350円、高校生・学生250円、小・中学生150円



賢治が歩き、愛した「牧場の標本」

小岩井農場(まきば園)

住所 雫石町丸谷地36-1

電話 019-692-4321

営業時間 9:00～17:00(最終入園1時間前)

休園日 なし※施設点検による臨時休業あり ※季節により営業時間、入場料が変わります。公式HP要確認。

入場料 大人800円/子ども300円/ペット(犬)500円



自然を知るスポット

豊富な情報と多彩なアクティビティ

網張ビクターセンター

住所 雫石町長山小松倉1-2(網張温泉)

電話 019-693-3777

開館時間 9:00～17:00

休館日 11月～3月の毎週火曜日、12/29～1/3

入館料 無料(自然観察会は別料金の場合あり)



火山活動の情報発信基地

イーハトーブ火山局

(岩手山火山防災情報ステーション)

住所 八幡平市松尾寄木第2地割515

電話 0195-78-4881

開館時間 9:30～15:30

休館日 毎週月曜日(祝日の場合翌日)、12/29～1/3

入館料 無料



※情報はすべて2026年4月現在。
営業時間・休館日をご確認のうえお出かけください。

岩手山

そらの散亂反射のなかに
古ぼけて黒くえぐるもの
ひかりの微塵系列の底に
きたなくしろく澱むもの

制作協力

伊藤菊一（岩手大学教授）

岡村民夫（法政大学教授）

木村直弘（岩手大学教授）

佐々木 陽（盛岡・宮沢賢治の会会長）

塩屋昌弘（盛岡大学准教授）

宮澤明裕（宮沢賢治記念館学芸員）

宮澤和樹（林風舎代表取締役）

岩手大学人文社会科学部
宮沢賢治いわて学センター

雫石と宮澤賢治を語る会

宮沢賢治学会イーハトーブセンター

宮沢賢治記念館

盛岡・宮沢賢治の会

（五十音順敬称略）

参考文献

『イーハトーブ温泉学』
岡村民夫 みすず書房 平成20年発行

『岩手山』
岩手放送 アイ・ビー・シー開発センター 昭和48年発行

『賢治さんが歩いた雫石－雫石と宮澤賢治を語る会30周年記念誌』
雫石と宮澤賢治を語る会 令和6年発行

『賢治と盛岡』
牧野立雄 賢治と盛岡刊行委員会 平成21年発行

『新校本宮澤賢治全集第十六巻下』
筑摩書房 平成13年発行

『十和田八幡平国立公園 岩手山・秋田駒ヶ岳等自然解説マニュアル』
網張ビジターセンター運営協議会 平成23年発行

（五十音順）

※掲載した作品本文は『新校本宮澤賢治全集』筑摩書房を底本とした。
※詩「国立公園候補地に関する意見」の題は後世の研究により付されたもので、
原文では「国立公園候補地に関する」と書かれている。

網張温泉側から見た岩手山。十和田八幡平国立公園の最高峰